

2022 年 1 月

食料安全保障月報 (第 7 号)



令和 4 年 1 月 31 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2022 年 1 月食料安全保障月報（第 7 号）

目 次

概要編

I	2022 年 1 月の主な動き	1
II	2022 年 1 月の穀物等の国際価格の動向	3
III	2021/22 年度の穀物需給（予測）のポイント	3
IV	2021/22 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	3
V	今月の注目情報 南米の乾燥と穀物生産・輸出への影響	4

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	7
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	8
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	9
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	11
5	FAO 食料価格指数の推移	15
6	食品小売価格の動向	16

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞	2022/23 年度の冬小麦の播種面積は前年度に比べ増加する見込み
	＜カナダ＞	2022/23 年度の播種面積は前年度に比べ増加する見込み
	＜豪州＞	2021/22 年度の生産量、輸出量は史上最高の見込み
	＜EU＞	2021/22 年度の EU27 の飼料用消費量は前月に比べ減少する見込み
	＜中国＞	2021/22 年度の輸入量は前年度に比べ 23.3%減少する見込み
	＜ロシア＞	ロシア政府は輸出関税を累進式にし、輸出枠 800 万トンを設定
2	とうもろこし	8
	＜米国＞	生産量史上第 2 位、エタノール用需要増、輸出減の見通し
	＜ブラジル＞	南部の高温・乾燥で単収下方修正も、生産量史上最高の見通し
	＜アルゼンチン＞	高温・乾燥で単収下方修正も、生産量史上最高、輸出税は継続
	＜中国＞	生産量史上最高、消費量も史上最高の見通し
3	コメ	13
	＜米国＞	前月から下方修正されるも単収は史上最高
	＜インド＞	2021/22 年度の輸出量が上方修正
	＜中国＞	インドからの碎米輸入が急増
	＜タイ＞	2020/21 年度の輸出量が上方修正
	＜ベトナム＞	生産量や輸出量などが上方修正

Ⅱ 油糧種子

大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	19
＜米国＞ 生産量は史上最高、輸出減の見通し	
＜ブラジル＞南部の高温・乾燥で単収下方修正も、生産量は史上最高の見通し	
＜アルゼンチン＞高温・乾燥で収穫面積・単収下方修正、輸出税は継続	
＜中国＞ 収穫面積の減少で減産見通し、輸入量は史上最高の1億トン	
＜カナダ＞ 西部での高温乾燥の影響で減産見通し	

特別編「ロシアの農産物貿易とコロナ感染拡大の影響」

※ 農林水産政策研究所 研究成果報告会

「ロシア、ブラジル・アルゼンチン、オーストラリアーコロナ禍と農業ー(2021年11月30日)」での長友 謙治 総括上席研究官(国際領域長)の報告を基に作成。

http://www.maff.go.jp/primaff/koho/seminar/2021/attach/pdf/211130_02.pdf

【利用上の注意】

表紙写真：

黒海沿岸に位置するロシアの主要穀物輸出港「ノボロシスク港」2015年8月撮影

(概要編)

I 2022 年 1 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2021/22 年度の作況については、北半球はほぼ確定したが、これから作付け・収穫が行われる南半球は今後も変動する可能性。

品目別にみると、1 月の米国農務省 (USDA) の需給報告では、小麦については、生産量はアルゼンチン等で上方修正され史上最高となるものの、米国やカナダの減産により世界の期末在庫率は前年度を下回っていること等から、国際相場は高い水準で推移しており、今後も注視が必要。

一方、大豆・とうもろこしについては、米国で大豆が史上最高の生産量となるも、南米の乾燥の影響で、生産量が下方修正されたため、期末在庫は依然としてタイトな状況であり、南半球の状況を中心に引き続き注視していく必要。

FAO (国連食糧農業機関) が公表している食料価格指数 (最新値: 12 月) については、主に植物油 (185→179) 及び砂糖 (120→116) の下落の影響により、11 月から下落 (135→134) したものの、引き続き高い水準で推移。

海上運賃については、バルチック海運指数 (穀物輸送に主に使用される外航ばら積み船の運賃指数) は、10 月に直近 5 年間の最高値を記録して以降、下落傾向で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、1 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について (農林水産省 HP)

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



1 米国産大豆は史上最高の豊作も、小麦は19年ぶりの低水準

米国農務省（USDA）の1月需給報告によれば、2021/22年度の米国のとうもろこし及び大豆の生産量はいずれも前年度より増産となり、それぞれ3億8,390万トン（2016/17年度に次ぐ史上第2位）、1億2,070万トン（史上最高）となる見通し。一方、小麦は春小麦が高温乾燥の影響を受けたことで、小麦全体で前年度より10%減の4,480万トンと2002/03年度以来の低水準となる見通し。

一方、米国の期末在庫率は、とうもろこし及び大豆については増産により前年度より改善されたが、それぞれ過去5年平均と比較すると10.4%、8.0%と低水準になっている。また小麦については、減産に伴い前年度より低下し、32.0%となっている。

2 ロシアは2月半ばから6月まで穀物輸出枠を設定

ロシアは、2021年6月から小麦、大麦及びとうもろこしに、同年9月からひまわり油に可変輸出関税を導入しており、現在も継続中。中でも小麦の関税額は2021年6月上旬の29.7ドル/トンから大幅に上昇し、2022年1月14日決定時点では97.5ドル/トンとなっている。

さらにロシアは、2022年2月15日から6月30日まで、小麦800万トン並びに、とうもろこし、大麦及びライ麦の合計で300万トンの輸出枠の設定について2021年12月31日付けにて公布した。なお、1月31日からは輸出価格に応じた3段階の可変輸出関税が適用され、2月15日から枠内に適用される。枠外については税率50%（最低100ユーロ/トン）が適用されることとなっている。

一方、ウクライナでは、2021/22年度の小麦の輸出上限数量を2,530万トンとすることで、政府と業界との間で合意がされている。さらに、その内数として製粉用小麦の輸出上限数量を設定することについて議論されている。

3 中国の穀物生産目標と輸入動向

国際穀物理事会（IGC）の情報によれば、中国農業農村部は、食料安全保障を確保するために、2025年までに食糧（穀物、豆類、いも類の計）生産量については6億5,000万トン以上を保持し、できれば7億トンの大台に引き上げる、作付面積は1億1,700万ヘクタール以上で安定させるとの目標を発表した。

品目別の生産量目標は、コメ2億1,500万トン（もみベース）、小麦1億4,000万トン、とうもろこし2億7,750万トン、大豆2,300万トン、菜種1,800万トンとなっている。

一方、需要増に伴う輸入に関しては、アフリカ豚熱（ASF）からの豚肉生産の回復に伴い、過去と比較して穀物の輸入量がここ2年間は高水準で推移している。

中国海関総署の速報によると、2021年の小麦及び小麦製品の輸入量は980万トン（対前年比17%増）、とうもろこしの輸入量は、2,840万トン（対前年比152%増）と前年より増加している。

なお、2020年に輸入量が1億トンを超えた大豆については、2021年は9,650万トン（対前年比4%減）と高水準ながらも前年よりは減少している。

また、2021年は小麦、とうもろこし、大豆とも、米中通商協議1次合意の影響もあり、前年と比較して米国産の輸入比率が高まっている。

Ⅱ 2022 年 1 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、12月末、280ドル/トン台前半で推移。1月に入り、アルゼンチン産小麦の豊作や、米国産冬小麦の作付面積が市場予想を上回ったこと、USDAの1月需給報告での世界の期末在庫量が市場予想を上回ったこと等から270ドル/トン台前半まで下落した。その後、米国中西部の寒波の影響懸念や、ロシア、ウクライナの政治的緊張等から値を上げ、1月下旬現在、290ドル/トン前後で推移。

とうもろこしは、12月末、230ドル/トン台前半で推移。1月に入り、南米の短期的な降雨予報等はあったものの、原油価格の上昇、ラニーニャ現象に伴う南米の高温・乾燥懸念等から価格は小幅に上昇し、1月下旬現在、240ドル/トン前後で推移。

コメは、12月下旬、410ドル/トン台前半で推移。1月に入り、アフリカ諸国からの新規需要や貿易業者による輸出成約済みの数量を確保するための買いが進み、更にバーツ高が価格を下支えしたことで、1月上旬には430ドル/トン台半ばまで値を上げた。その後もバーツ高により若干値を上げ、1月中旬現在、440ドル/トン台前半で推移。

大豆は、12月末、480ドル/トン台後半で推移。1月に入り、ラニーニャ現象に伴う南米の高温・乾燥懸念等から1月上旬に510ドル/トン台半ばまで値を上げた。その後、南米の短期的な降雨予報等から一旦490ドル/トン台後半まで値を下げたものの、再び乾燥懸念の高まりにより値を上げ、1月下旬現在、520ドル/トン台前半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2021/22 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月から180万トン下方修正され27.9億トン。消費量は、前月から180万トン下方修正され27.9億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

また、期末在庫率は前年度を下回り28.4%となる見込み（資料2参照）。

生産量は、前月予測から、小麦で上方修正、とうもろこし、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され27.9億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、とうもろこしで上方修正、小麦とコメで下方修正され、穀物全体で下方修正され27.9億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦、とうもろこしで下方修正、コメで上方修正され、5.1億トンの見込み。

期末在庫量は、7.9億トンと前月予測から下方修正、期末在庫率は前月からわずかに下方修正された。

(注：数値は1月のUSDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

Ⅳ 2021/22 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り6.2億トン。消費量は前年度を上回り6.2億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

なお、期末在庫率は前年度を下回り、17.2%となる見込み。

(注：数値は1月のUSDA「Oilseeds: World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報：南米の乾燥と穀物生産・輸出への影響

2021年10月以降、ラニーニャ現象が発生している中、12月以降、ブラジル中西部は降雨に恵まれているが、ブラジル南部からアルゼンチンにかけて乾燥傾向となっており、とうもろこしや大豆の生産に影響を及ぼす恐れがあるとみられている。アルゼンチンは、国内向けの穀物の確保のため、小麦とうもろこしに輸出上限数量を設定した。最近のブラジル及びアルゼンチンの生産・輸出動向をまとめた。

1 ブラジル

(1) 生産動向

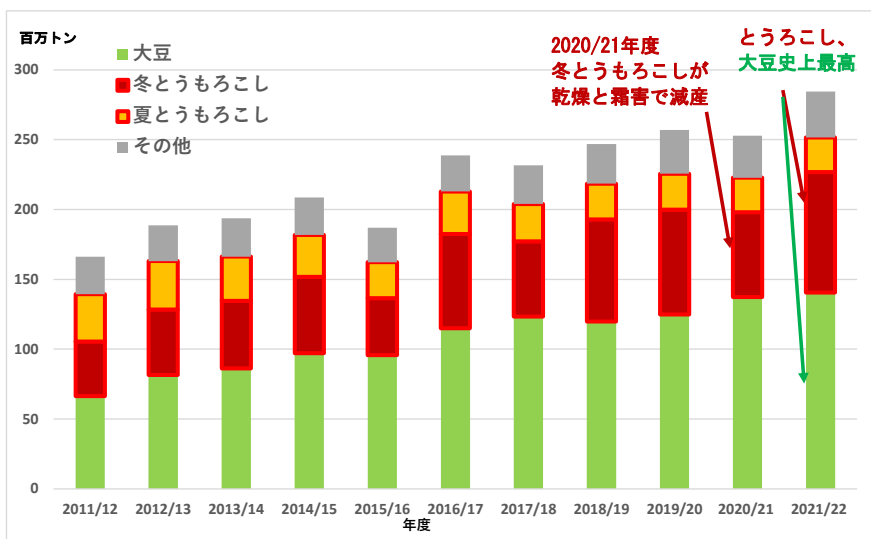
2021年12月以降、大豆の最大生産州である中西部のマット・グロッソ州及び北東部では、降雨が多く、一部で降雨過多による病害等の懸念はあるものの、土壌水分は恵まれており、おおむね順調に生育している。マット・グロッソ州の一部の圃場では、降雨による中断はあるものの、収穫が開始された。前年度は作

付けが遅れた冬とうもろこしの作付けが順次開始されるとみられる。

一方、ラニーニャ現象が2021年10月ごろから発生している中、南部では2021年11月から12月の降水量が平年の半分となっており、特にパラナ州では、12月の降水量が歴史的な低水準であった。このような状況から、大豆や夏とうもろこしの作柄に影響があるとみられている。

ブラジル食料供給公社（CONAB）の1月穀物レポートによれば、2021/22年度の穀物等（穀物及び、油糧種子）の生産量は、対前年度比12.5%増の2億8,440万トンとなる見通し。そのうち、ブラジルの主要作物である大豆は、南部の乾燥により前月から230万トン下方修正されたが、マット・グロッソ州での増産等から、前年度を2.3%上回る1億4,050万トンとなる見通し。とうもろこしは、同様に南部の乾燥で夏とうもろこしが430万トン下方修正され2,480万トンとなるも、冬とうもろこしが8,810万トンとなり、合わせて干ばつや霜害で減産となった前年度を29.7%上回る1億1,290万トンとなる見通し。大豆、とうもろこしも現時点では史上最高の生産量となる見通し。

図1 過去10年間のブラジルの穀物・油糧種子生産量の推移



出典: CONAB の資料を農林水産省で加工

表 2000年～21年春のラニーニャ・エルニーニョ現象

エルニーニョ現象		ラニーニャ現象	
発生期間	季節数	発生期間	季節数
2002年夏～2002/03年冬	3	2005年秋～2006年春	3
		2007年春～2008年春	5
2009年夏～2010年春	4	2010年夏～2011年春	4
2014年夏～2016年春	8	2017年秋～2018年春	3
2018年秋～2019年春	3	2020年夏～2021年春	4

出典：気象庁

写真 ブラジル パラナ州の大豆
2月には収穫を迎える



(2) 輸出動向

大豆の輸出については、米国農務省（USDA）の1月見通しによれば、前月予測から変更はなく9,400万トン（対前年度比15%増）と見込まれている。なお、2021/22年度は作付けが順調に行われたことから、降雨不足で作付け遅れとなった2020/21年度と比較して、2月以降、収穫が順調に行われるとみられる。その結果、新穀大豆の輸出が順調に開始され、中国の輸入も、米国産からブラジル産へ順次シフトするとみられる。

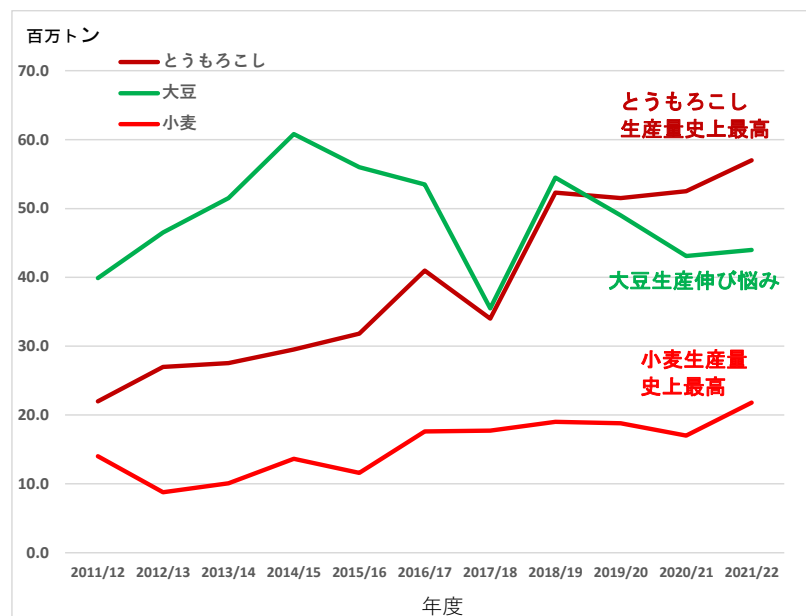
とうもろこしについては、USDAの1月見通しによれば、前月予測から変更はなく4,300万トン（対前年度比2.2倍）とみられている。主に輸出に回るのは大豆の収穫後に栽培される全体の7割を占める冬とうもろこしであり、輸出は、その収穫が終了する7月以降になるとみられる。

2 アルゼンチン

図2 過去10年間のアルゼンチンの小麦、大豆、とうもろこしの生産量の推移

(1) 生産動向

ブエノスアイレス取引所の1月13日付け週報によれば、収穫が終了した2021/22年度の小麦の生産量は天候に恵まれ、史上最高の2,180万トンが見込まれている。一方、ラニーニャ現象が発生する中、1月以降乾燥傾向の継続による土壌水分不足から、大豆やとうもろこしの作付けは前年度より遅れ気味となっている。同取引所の20日付け週報によれば、大豆の作付進捗率



94.8%、とうもろこしは87.9%となった。出典：ブエノスアイレス取引所の資料を農林水産省で加工している。同取引所では、大豆、とうもろこしの生産量を当初それぞれ、4,400万トン、5,700万トンと見込んでいたが、この数値については12月から1月の乾燥の影響を受け更新される可能性があるとみられる。

(2) 輸出動向

アルゼンチンでは、穀物や油糧種子、牛肉等の輸出において、財政赤字の補填等のため、2022年1月現在、大豆に最大33%、小麦及びとうもろこしに12%の輸出税が付加されている。さらに、最近の食品価格の高騰に対する国内向け穀物の確保のため、政府は、2021年12月17日付けで、2021/22年度産のとうもろこし4,160万トン、小麦1,250万トンの輸出上限数量を設定することを公表した。

3 国際貿易や米国の2022年産の作付けへの影響

近年、中国の旺盛な穀物輸入に伴い、南米では穀物等の生産量を増加させてきた。ブラジルでは中国向けの大豆とその裏作の冬とうもろこしを中心に穀物等の生産量を伸ばしてきた。特に大豆については米国を抜き、世界1位の生産・輸出国となった。

一方、アルゼンチンでは、最大33%という高い輸出税のため、大豆の生産量は伸び悩み、大豆と比べ輸出税が12%と低いとうもろこし及び小麦の生産量が増加している。なお、今般設定されたアルゼンチンの輸出上限数量については、とうもろこし及び小麦ともに前年度の輸出数量（USDAによれば、とうもろこし3,950万トン、小麦1,150万トン）を上回っており、現時点では国際穀物需給に大きな影響はないとみられる。

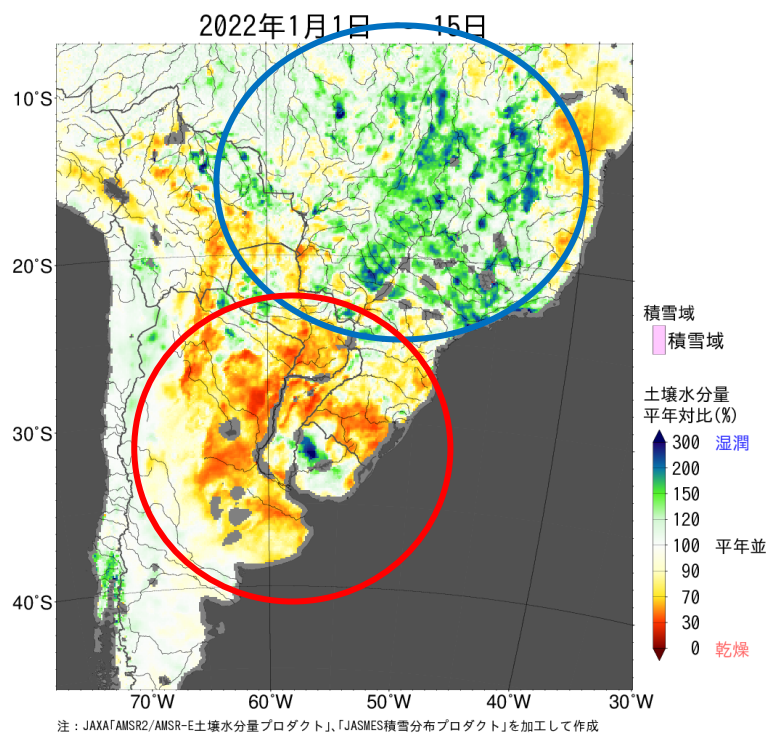
ラニーニャ現象に伴うとみられる南米の乾燥が、2月以降も継続するかは現在のところ不透明ではあるが、今後、南米の生産量や輸出量が乾燥の影響を受けて減少すれば、米国農家の作付け意欲が刺激され、2022/23年度の米国的大豆及びとうもろこしの作付面積は増加するとみられる。ただし、肥料価格が高騰していることにより、肥料投入量が少ない大豆の方が有利とみられることや、2021年の中国の大豆輸入量が前年より減少したこと等がどの程度米国の作付けに影響するか、今後注視していく必要があるとみている。

図3 ブラジル、アルゼンチンの1月前半の土壌水分量の平年対比

ブラジル中西部：土壌水分量は平年より多い(青丸)、

ブラジル南部からパラグアイ、アルゼンチン北部：土壌水分量は平年より少ない(赤丸)

<https://jasmai.maff.go.jp/>

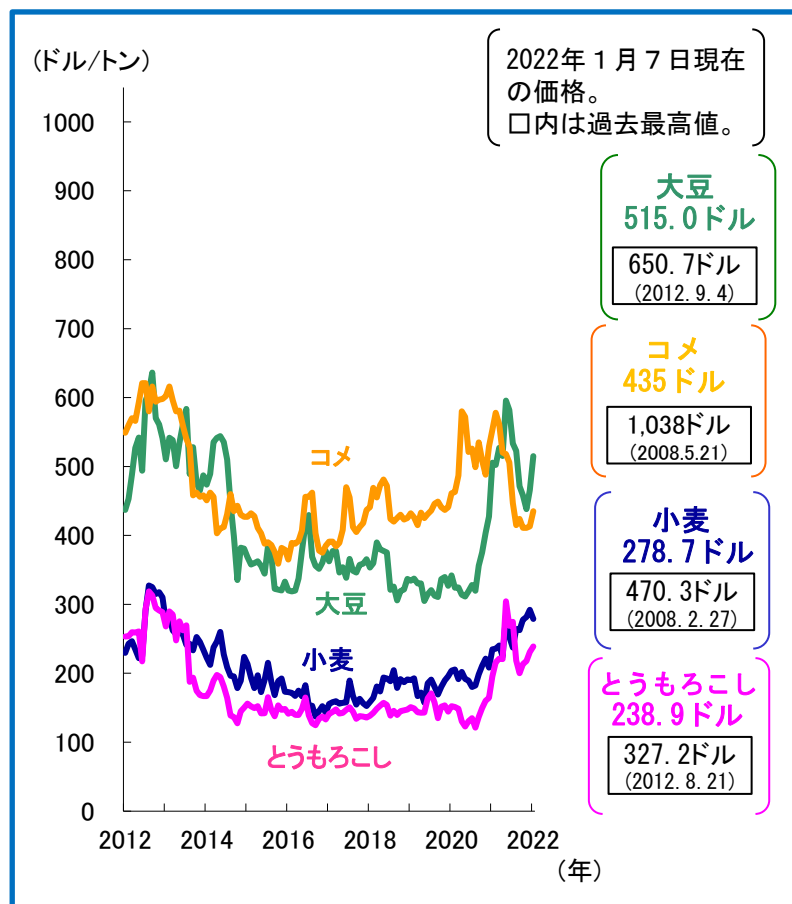
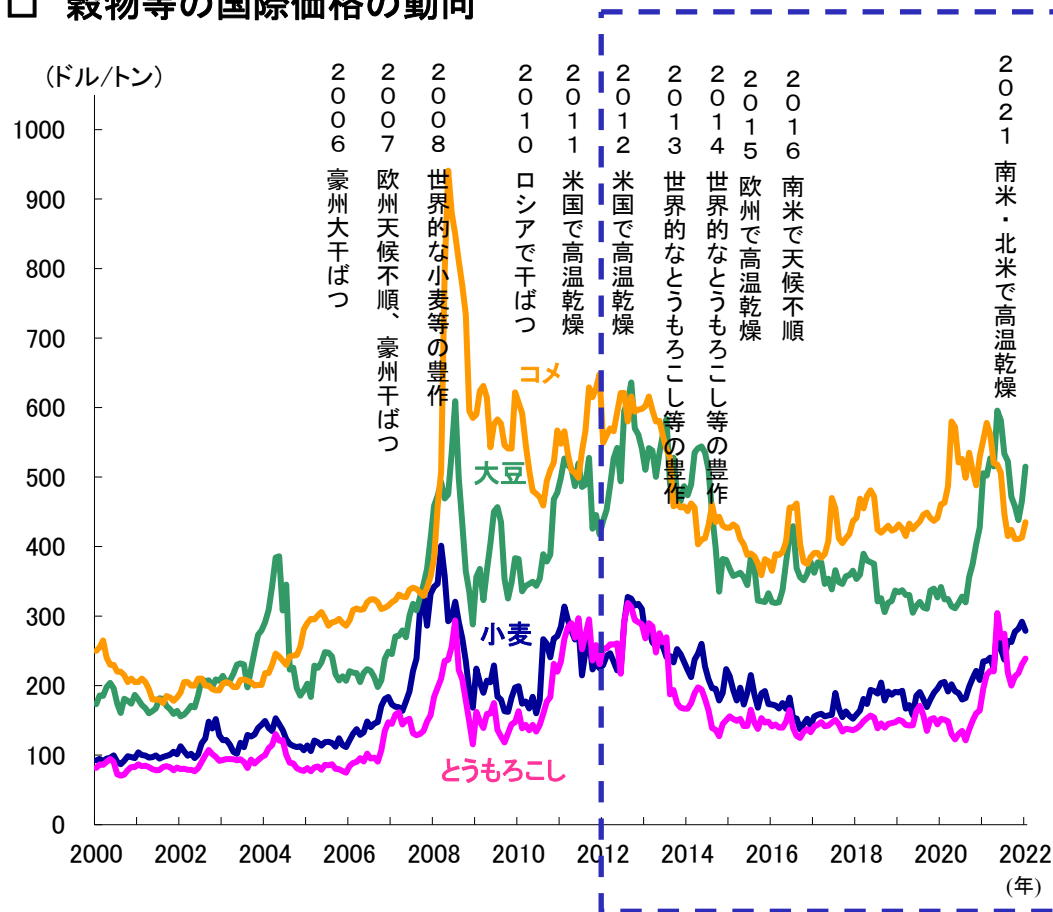


資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

○とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。

○なお、穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により、2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



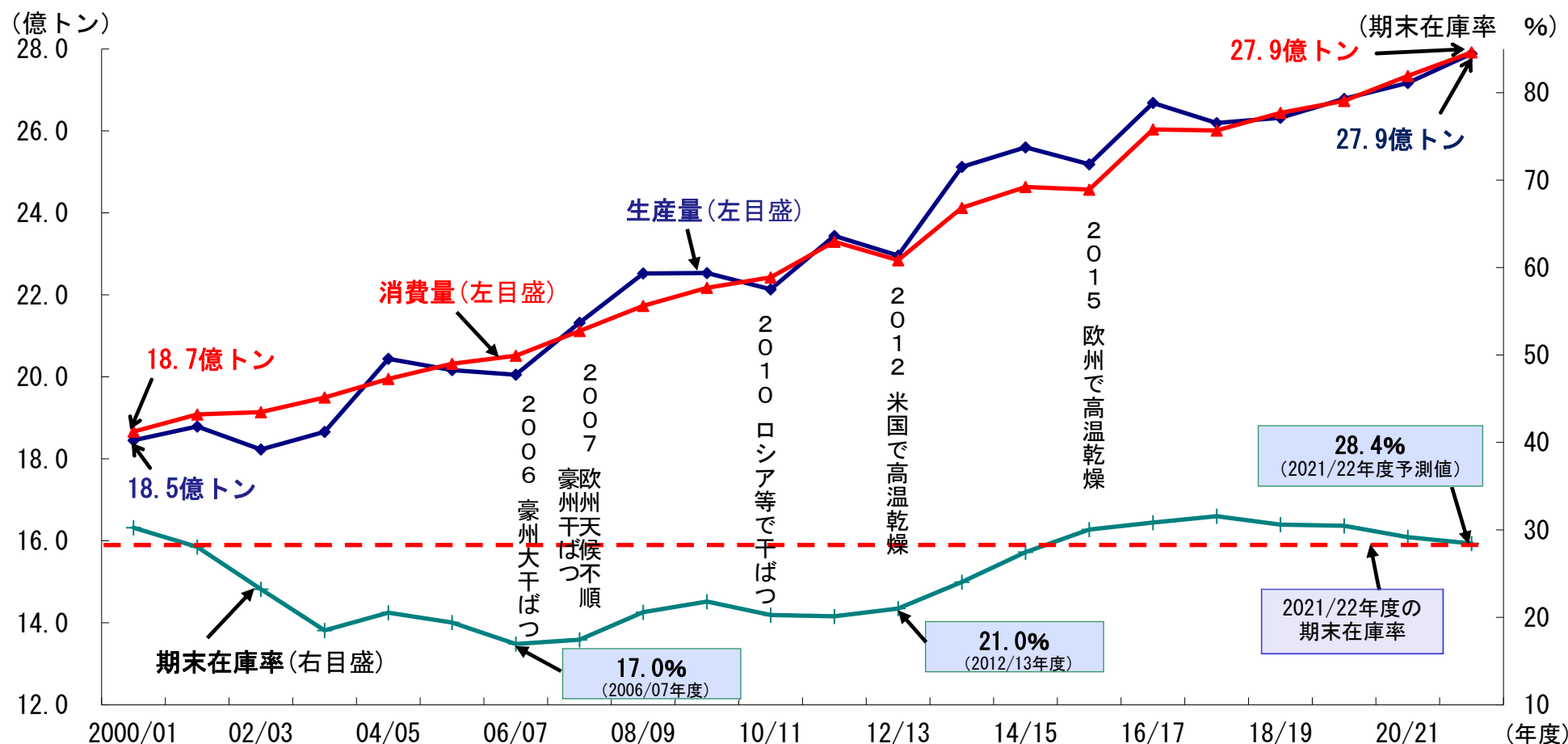
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2021/22年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2021/22年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、28.4%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

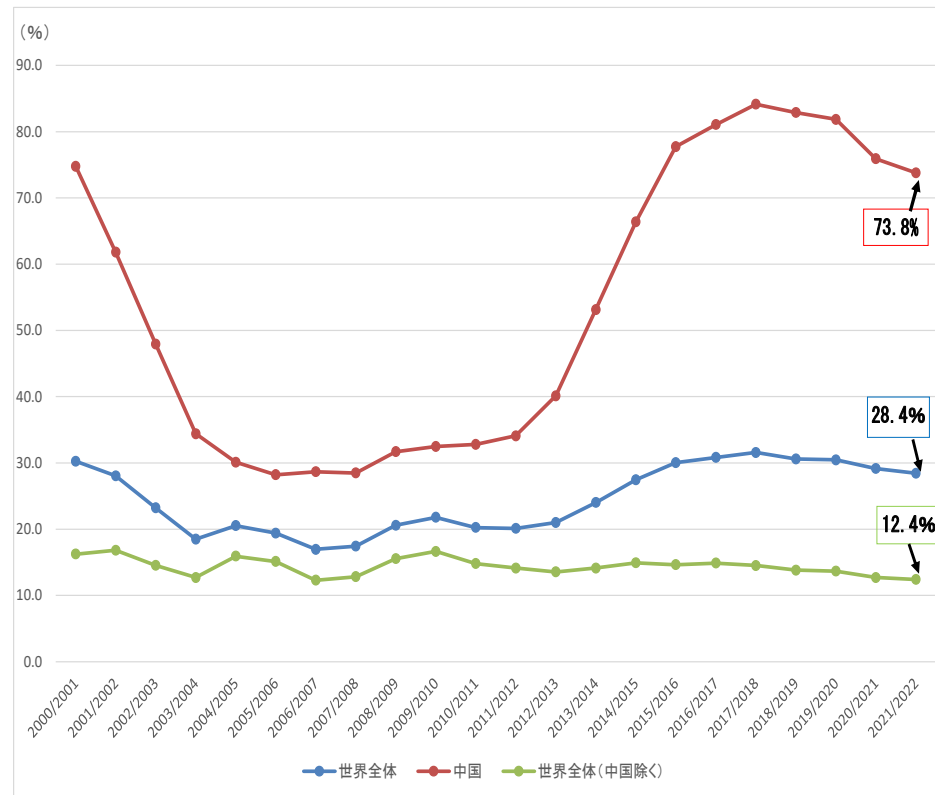


資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (January 2022)、「PS&D」

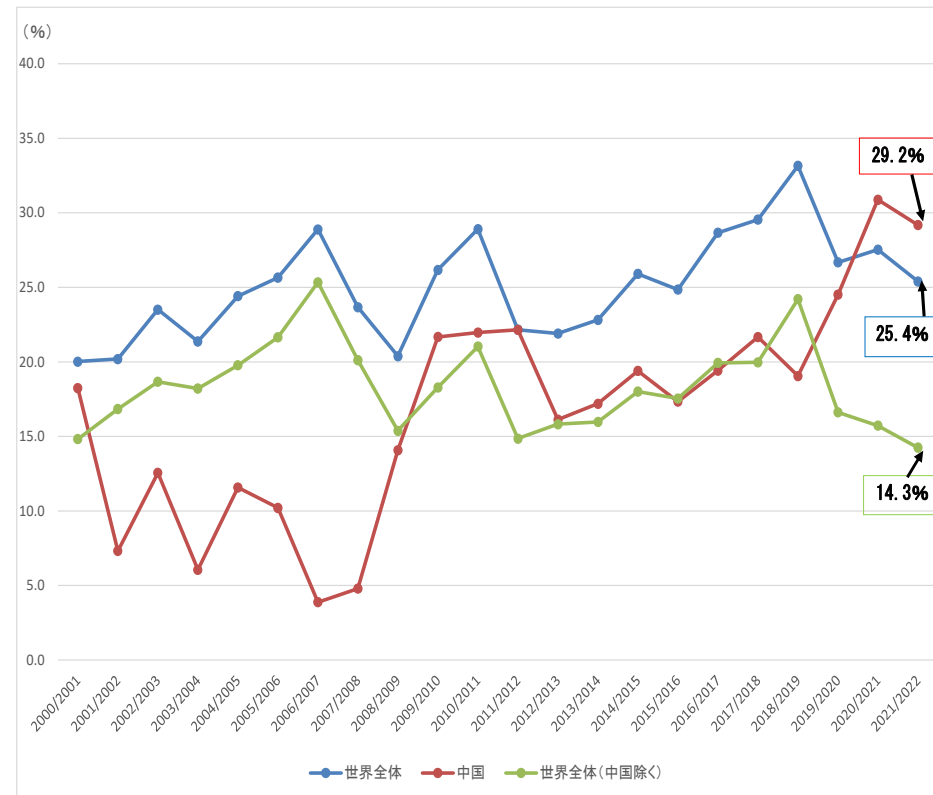
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(January 12, 2022)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

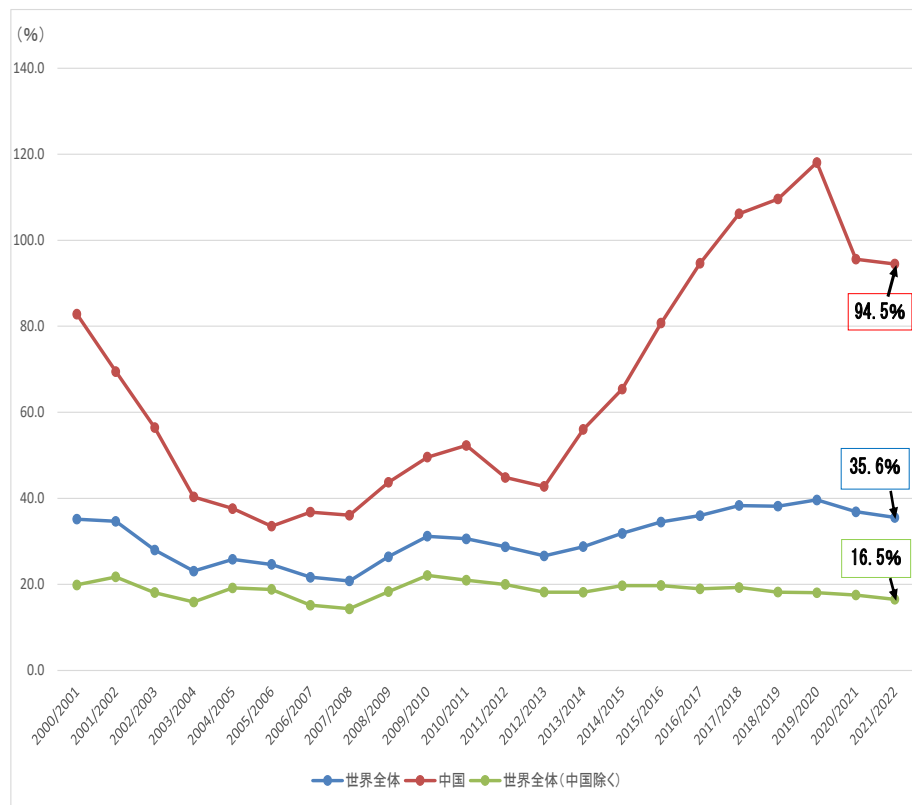
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

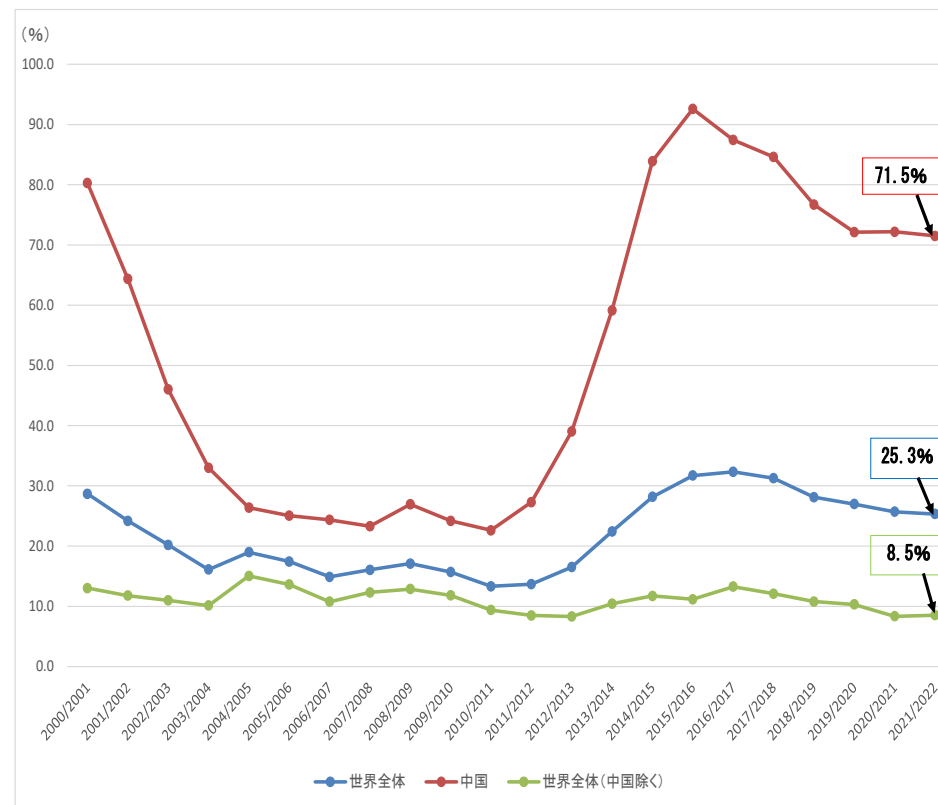
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(January 12, 2022)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

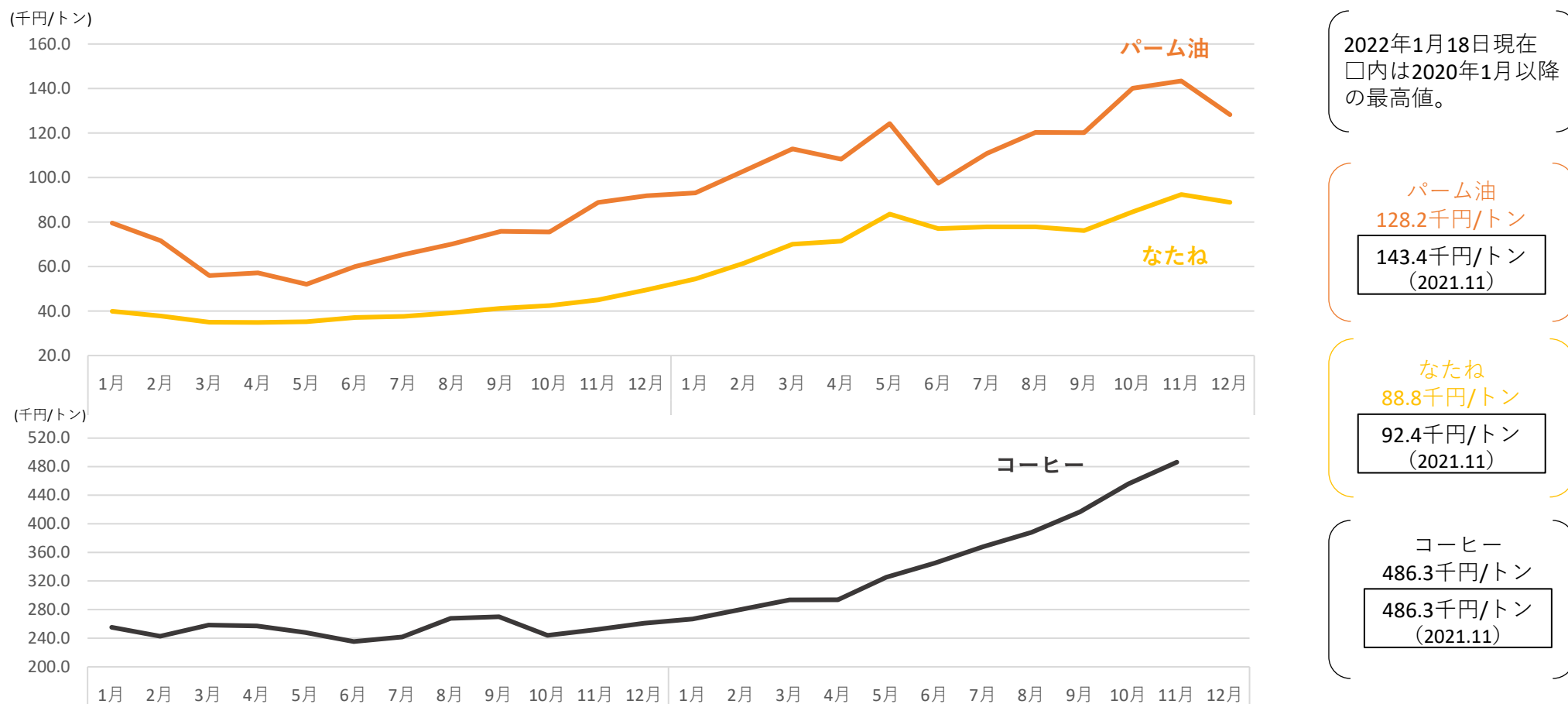
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでの高温、乾燥の影響により、減産と品質の低下が見られる。パーム油については、新型コロナウイルスの感染拡大による労働力不足により、主産地であるマレーシアにおいて、収穫作業が進まず、減産傾向となっている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。

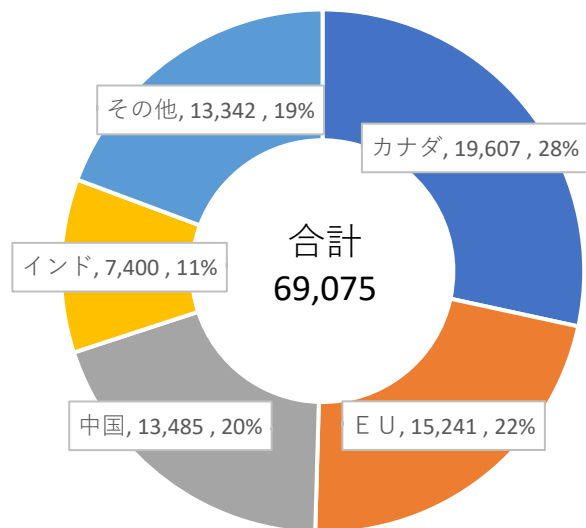


※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

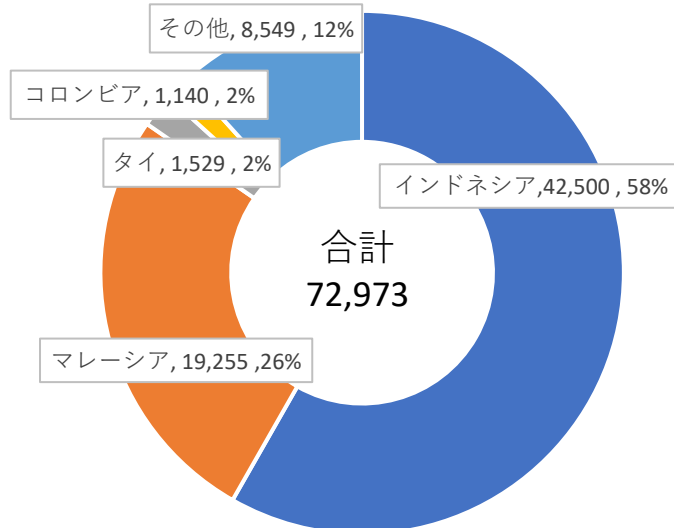
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2019/20）
（単位：千トン）



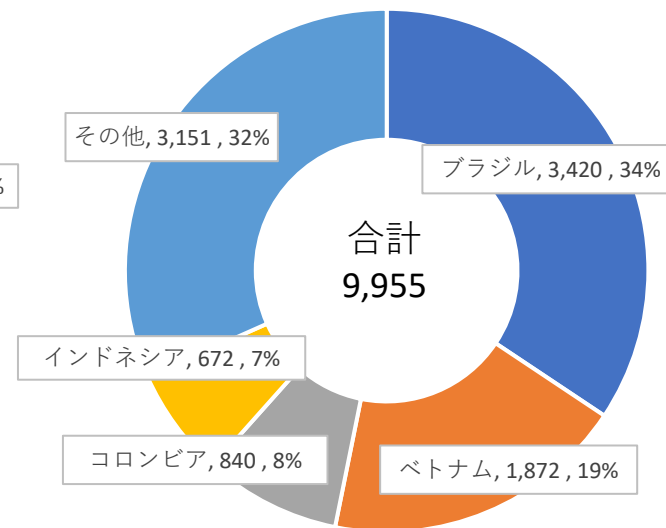
※米国農務省穀物等需給報告

パーム油生産量（2019/20）
（単位：千トン）



※米国農務省穀物等需給報告

コーヒー生産量（2019）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2020年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,194	97.4%
オーストラリア	59	2.6%
その他	0	0.0%
合計	2,252	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	447	58.8%
インドネシア	313	41.2%
その他	0	0.0%
合計	761	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	117	29.4%
ベトナム	101	25.2%
コロンビア	61	15.2%
その他	120	30.2%
合計	399	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11-22）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年												2021年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
なたね	39.9	37.8	35.0	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8
前月比	103.9	94.7	92.6	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2
前年同月比	101.0	94.9	91.6	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年												2021年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
パーム油	79.5	71.6	55.9	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2
前月比	105.5	90.0	78.2	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4
前年同月比	134.5	115.7	96.0	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料４－４ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年												2021年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
コーヒー	255.2	242.8	258.3	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	
前月比	90.9	95.2	106.4	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	
前年同月比	104.8	98.3	108.5	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	

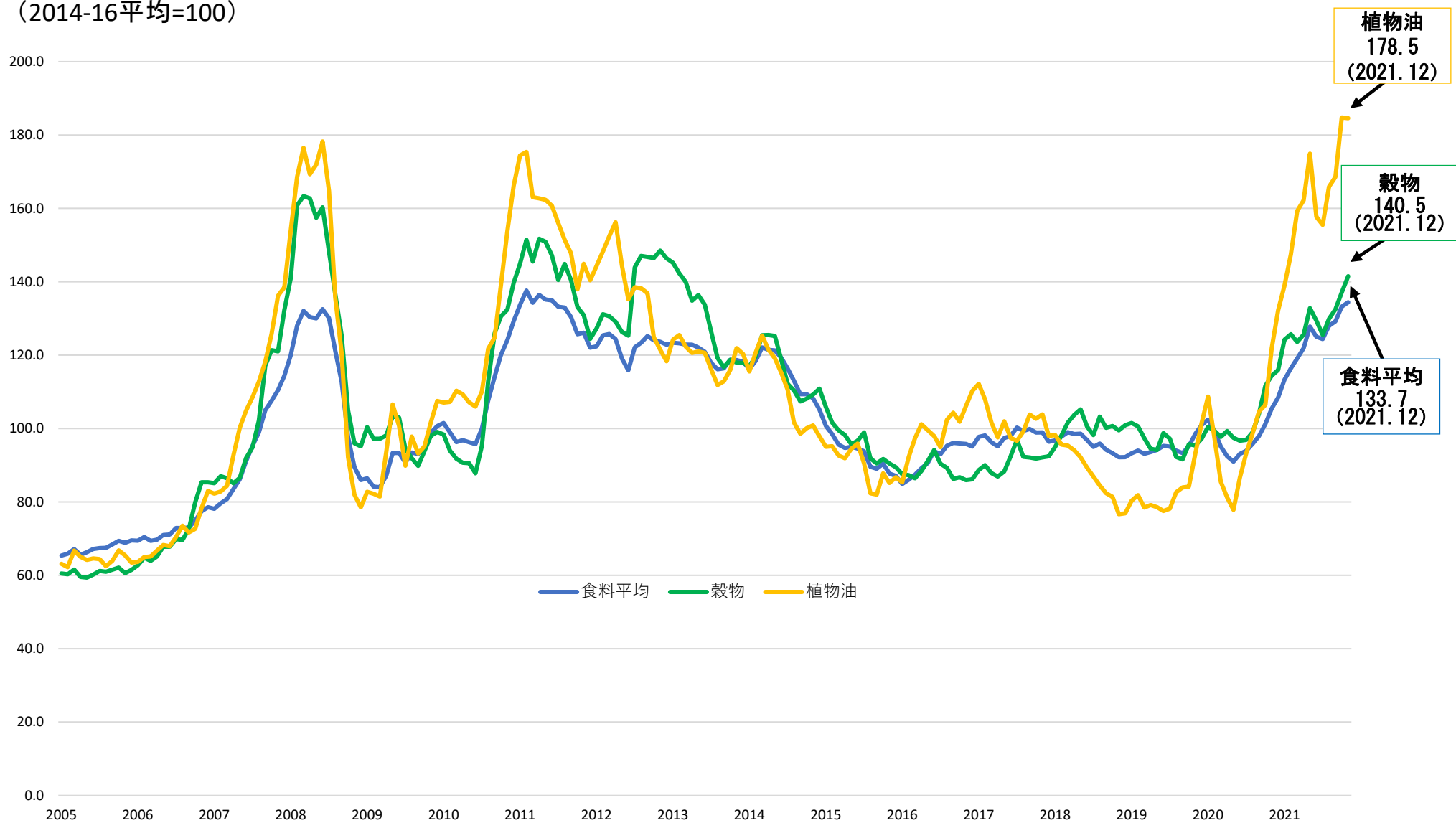
大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料:FAO「Food Price Index」(2022.1)より作成

注:穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

資料6 食品小売価格の動向

○ 令和3年12月の国内の加工食品の消費者物価指数は95.3～121.6（前年同月比で－3.9%～22.8%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和3年7月～令和3年12月）

	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	7月	8月	9月	10月	11月	12月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.9	99.6	100.2	101.1	100.0	99.3	99.4	99.3	99.6	99.7	100.0	0.8%
即席めん	96.2	95.7	95.3	98.5	100.0	100.4	100.2	99.6	100.9	101.0	98.5	-0.4%
豆腐	98.1	98.6	98.8	99.1	100.0	101.0	100.8	101.6	102.0	102.6	102.5	1.6%
食用油 (キャノーラ油)	106.3	102.7	101.5	100.9	100.0	103.9	107.9	113.9	118.1	120.5	121.6	22.8%
みそ	97.1	96.9	97.4	99.1	100.0	99.5	98.9	100.0	99.2	99.6	97.6	-0.7%
マヨネーズ	103.8	102.3	100.8	100.7	100.0	108.6	110.2	111.2	112.4	112.5	112.0	13.4%
チーズ	97.7	97.3	100.9	101.3	100.0	98.7	100.6	100.6	98.4	95.9	95.3	-3.9%
バター	99.0	99.3	99.5	99.9	100.0	99.9	99.8	99.9	99.9	99.8	99.9	0.0%
生鮮食品を 除く食料	96.1	97.0	97.9	99.0	100.0	100.1	100.1	100.4	100.7	101.0	100.9	1.1%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査（農林水産省） （令和3年7月～令和4年1月）

	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3								
品目	平均	平均	平均	平均	平均	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.0	97.6	97.9	101.3	100.0	97.8	97.5	98.8	98.6	98.2	98.4	102.1	3.8%	2.8%
即席めん	92.8	92.6	92.4	97.9	100.0	99.0	99.0	99.0	99.0	99.0	97.8	98.4	0.6%	-0.6%
豆腐	102.2	100.8	100.1	100.9	100.0	100.3	101.1	105.0	100.7	101.1	100.7	101.6	0.9%	1.8%
食用油 (キャノーラ油)	99.6	97.9	97.9	103.5	100.0	100.7	106.1	109.0	112.8	115.3	116.3	119.1	2.4%	21.3%
みそ	90.3	91.9	96.6	100.4	100.0	98.1	99.0	102.7	98.4	98.8	97.5	97.7	0.2%	-1.3%
マヨネーズ	99.9	99.1	97.9	103.1	100.0	104.5	105.9	106.6	106.6	106.6	105.6	105.9	0.3%	7.0%
チーズ	95.5	95.2	98.6	100.9	100.0	99.5	99.1	103.0	98.6	93.6	92.1	98.6	7.1%	-1.4%
バター	98.2	98.8	99.0	99.5	100.0	99.5	99.5	99.5	99.9	99.7	99.7	99.7	0.0%	-0.5%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。